

花 き

実 況

1 キ ク

奥越の7月中旬の新盆咲きは、小ギクで「シューペガサス」、「小紫」等が7月22日現在で出荷が始まっており、例年より7日以上早い。輪ギクで「スーパーイエロー」、「精の零」、「星の輝」等が出荷中である(7月25日調査)。日量約50~400箱で暮れ植えは7月下旬、春

表1 7月7日の蕾の状況(奥越)

地域	作型	草丈 (cm)	出蕾率 (%)	蕾径 (mm)
大野	小紫 暮植え	110~120	100	3.8
	小鈴 暮植え	100~110	85	4.3
	シューペガ 暮植え	95~110	100	4.3
富田(M)	小紫 春植え	85~95	10	5.4
	小鈴 春植え	78~92	100	3.1
富田(Y)	小紫 暮植え	90~95	90	3.9
	小鈴 暮植え	90~105	100	3.5
	シューペガ 暮植え	90	95	3.9
上庄	夕霧 暮植え	110~115	100	4.9
	山手白 暮植え	70~90	100	5.5
	天神 暮植え	100~120	100	4.7

植えは8月上旬がピークと予想される(表1)。

今年で11回目を数えるJAテラル越前キク部会品評会は7月22日に審査が行われ、23日まで大野市のショッピングタウンで展示が行われた。本年度は福井シードが制作したアレンジメントマム出荷用箱の展示が行われた(写真1)。

暮れ植え作型のピンチした「小鈴」が113cm、葉数50枚、蕾数52、「小紫」116cm、葉数55枚、蕾数65個、「シューペガサス」103cm、蕾数28個、「山手白」で7月下旬に開花見込である。

病害虫では、梅雨期間中に黒斑・褐斑病が少~中発生、白さび病が5圃場で発生、黒さび病が3圃場で発生していた。アザミウマ類による葉や花の食害が中発生、オオタバコガによる被害は、秋ギクの「くるみ」等で多発している。阪谷の一部で「精の零」で青枯病が中発生している(写真2)。

坂井の春植え8月咲きギクは開花が7日程度早く、草丈が全体的に短い(調査日:7月21日)。あわらの「小鈴」で草丈92cm、葉数47枚で、開花は8月3日頃である。坂井の「翁丸」は草丈86cm、花蕾数85個、開花盛期が8月8日頃、「恋心」が100cm、45個で7月28日頃に開花見込みである。エスレル10処理を3回程度行った畦は8月以降に開花する見込みである。アブラムシ類、アザミウマ類少発である。



写真1 新出荷箱の展示



写真2 キク青枯病

永平寺の春植え 8 月咲きギクの草丈は、7 月 13 日(去年は 8 日調査)調査で、福井二日市の 4 月 20 日定植において、「小鈴」が草丈 73cm、ばらつき大きく、「はじめ」62cm、「夕霧」57cm で、全体的に開花が早い見込みである。病虫害は「山手白」にダニ類が多くみられ、黒斑・褐斑病が中発生である。

福井市の春植え盆ギクは、二日市の 4 月 18～20 日定植の「小鈴」103cm(昨年 90cm)、蕾径 8mm、「花絵」99cm(96cm)で未発蕾～発蕾はじめ(エスレルなし)である。大土呂の「小紫」85cm、蕾径 9mm、収穫はじめ、「小雨」89cm、蕾径 9mm、収穫終わり、「小鈴」82cm(85cm)、蕾径 7mm、8 月上旬開花はじめ、「恋心」84cm(82cm)、蕾径 8mm、7 月下旬開花はじめ(エスレルなし)である。東郷のエスレル 2～3 回処理の盆ギクで、「小鈴」75cm(87cm)、蕾径 6mm、「小雨」86cm(77cm)、蕾径 4mm、「恋心」81cm、蕾径 3mm である。概ねエスレル処理を 2 回程度行った圃場では、開花が 8 月上旬になると予想される。病虫害では、黒さび病が少発生である。一部で 7 月上旬にオオタバコガの初齢～二齢幼虫に食害された跡がみられる。

丹生の春植え(4 月 7～14 日定植)8 月咲きギクは、7 月 14 日(10 日)調査で「小鈴」草丈 70cm(85cm)、蕾径 4mm(10mm)で、昨年より 7 日程度遅い。「花絵」草丈 84cm(90cm)蕾径 3(5)mm で、8 月中旬開花見込みである(表 2)。病虫害はカスミカメムシ類の食害がみられる。

南越の 7 月 14 日(昨年 9 日調査)調査で、「はじめ」99cm、蕾径 7mm、(83cm、10mm)、「恋心」89cm、蕾径

7mm で 8 月上旬開花(エスレル 2 回処理)見込みである。エスレルなしの「松風」は 78mm、蕾径 8mm で開花はじめである。開花盛期は 28 日頃と予測され、エスレル 2 回処理で 5 日程度開花を抑制したと予測される。病虫害はオオタバコガの食害がみられる。

二州の暮れ植えギクの「小雨」、「みのる」等の品種は収穫終了した。春植え 8 月咲き小ギクは例年通りの 4 月 14 日より定植され、7 月 19 日調査(昨年 7 月 7 日調査)で「水鳥」が草丈 68.0 cm、蕾径 6.7mm(昨年 62.4 cm、蕾径 4.6mm)、「翁丸」が草丈 62.4 cm、7.2mm(昨年 65.4 cm、蕾径 5.8mm)、「くれない」が草丈 73.6cm、蕾径 7.9 mm(昨年 70.0 cm、蕾径 4.1mm) である。病虫害は全体的にアザミウマ類が少発である。

9 月咲き小ギクの草丈は、「しらさぎ」が草丈 24.6 cm(昨年 53.0 cm)、「映紅」が草丈 21.2 cm(昨年 43.6 cm)、「わかさ」が草丈 15.8 cm と、昨年と比べ生育は遅れ気味である。病虫害は、キクモンサビダニによる紋々病が少発である。

彼岸出荷の「わかさ」、「映虹」は草丈 12.8cm(昨年 3.0cm)、8.2cm である。

若狭の暮れ植え作型の収穫はほぼ終了した。春植え 8 月咲きギクは 7 月 20 日調査(去年は 7 月 9 日調査)で、「翁丸」が草丈 83.0cm、蕾径 5.8mm(68.6 cm、7.7mm)、「くれない」が草丈 72.6 cm、花蕾膜切れ(昨年 61.8 cm、蕾径 4.6 mm)、「しらかば」が草丈 78.8cm、花蕾膜切れで(草丈 71.2cm、蕾径 6mm)、生育・開花は早い。病虫害ではアザミウマ類、白さび病が少発である。

露地の 9 月咲きギクの草丈は 7 月 20 日調査(昨年 7 月 9 日調査)で「南月」が草丈 78.8 cm(昨年 42.8 cm)、「大信」が草丈 80.6 cm(昨年 45.2 cm)、「おりがみ」が草丈 105.4 cm(昨年 56.2cm) で、病虫害ではアザミウマ類が少発生である。中輪ギクに被害が多い傾向がある。施設の 10 月咲きギクおよび電照の 11 月咲きギクが 7 月中下旬

表 2 7 月 14 日現在の生育状況(宮崎地区)

品種名	草丈(cm)	蕾径(mm)	開花時期
シューペガサス	67	4	8月上旬中旬
花風	73	3	8月中旬
小鈴	70	4	8月上旬中旬
恋心	76	5	8月上旬
花絵	84	3	8月中旬
やよい	67	8	7月下旬
かなえ	95	5	8月上旬
玉手箱	75	7	開花はじめ
秋水	65	8	7月下旬
秀いこい	92	7	7月下旬
小雨	100	5	開花はじめ

に定植した。

2 ユリ

奥越のシンテッポウユリ「オーガスタ」の切り下球根栽培は7月21日調査（昨年7月22日調査）で草丈106cm(110cm)、葉数84枚、花蕾数4.7輪で、昨年よりやや早い。出荷始めは7月15日で、7月下旬が開花盛期と予想される。実生苗は46cm(53cm)、41枚(35枚)で、8月中下旬開花見込みである。葉枯病が切り下球根栽培にみられる。

あわらの福井ユリは球根堀上と冷蔵が行われている。シンテッポウユリは根腐れ等により、生育のばらつきが大きく、草丈20~30cmである。

春江のユリは、ほぼ収穫が終了した。

3 スイセン

6月~7月にかけて球根掘り上げが行われ、6月20日に高温処理が開始された。7月4日から3日間くん煙処理が行われた。

抑制栽培の冷蔵処理受け入れが7月1日から開始された。7月25日に農薬浸漬、2週間の高温処理の後に3日間のくん煙処理が予定されている。

4 トルコギキョウ

坂井の二度きり栽培は7月上中旬までに出荷され、ほぼ出荷が終了した。7月8日にハウスを開放し、近隣のこども園の花摘み体験が行われた。「北斗星」、「レイナホワイト」等が80~100cmで、一部にヨトウ類がみられた。

奥越の春植えされた「ロジーナスノー」は45cm、12枚で発蕾しており7月20日頃からの出荷が見込まれる。

南越の7月14日(昨年7月9日調査)調査で晩生品種の「モレットマリン」が草丈69cm、一番花蕾長25mm(昨年93cmで開花はじめ)、「オウブカクテル」78cm、蕾長10mm、「ボヤージュグリーン」が73cm、蕾長20mmで、昨年より開花が早い。抑制栽培の4月に播種し40日間苗冷蔵した苗が7月14日から定植された(昨年5月5日播種で7月下旬定植)。

二州で、4月16、17日定植した「ブルーシルエット」83.4cm、「ピンクシルエット」94.4cmで開花盛期である。

若狭では、10月中旬定植作型、1月定植作型ともにほぼ終了した。5月下旬定植作型は草丈50~60cmで、7月中旬より開花している。

5 その他

あわら市の電照アスターはステラシリーズ、「ネネ」の出荷中である。城の「のぞみ」等は下葉かきが行われている。「ステラピンク」の草丈43cm、葉数55枚、「レッド」が63cm、葉数25枚、「ホワイト」が63cm、25枚、「ブルー」が53cm、28枚で、開花は7月下旬



写真3 花摘み体験



写真4 直売栽培研修会(美浜町)

の見込みである。9月彼岸出荷用の電照抑制は7月中旬に定植され、葉数7枚程度である。

越前市のストックでは「カルテット」シリーズが8月中旬に播種予定である。

7月5日に嶺南地域直売花卉栽培研修会が美浜町で開催され、55名の生産者、関係者が集まり、直売についての研修を行った。

対 策

1 夏期の灌水・高温管理

- 1) 本年は、5月～6月が高温気味に推移したため、マルチの中が乾燥している圃場も見られた。水分不足で肥効が悪く、急な降雨で逆に肥効が現れ、上部の葉が大きくなる株も見られる。この状態の時は根が弱っており、晴天時には萎ちようする現象が起こる。あわてて地温が高い日中に灌水すると、根を傷める危険性が高いので、夜間か日の出前の地温が低いときに灌水する。
- 2) キクでは生育後半に、上部の葉が小さくなるウラゴケ症状や、新葉がやけるカルシウム欠乏が出る株も見られる。晴天時の黒マルチ内温度は45℃以上になるため、欠乏症がでやすくなる。マルチの一部を切って、穴をあけ、水を灌注する。灌水後の日中は排水溝に水が溜らないように、通路の再整備や溝を掘る等の排水対策を行い、根を健全に維持し、新根の発生を促すようにする。
- 3) 施設は日中、高温になるので、天窗、妻窓、裾窓を開放し、通風を良くする。また、換気扇、送風機等を設置して、ハウス内の空気を循環させるようにする。

2 秋植え夏ギクの苗づくり

- 1) 親株として用いる株は病害虫に侵されていない株とする。とくに、キクスタントウイルス、キクモンサビダニ（紋々病）、白さび病の発生兆候がある場合は適宜防除する。被害が大きかった品種は更新する。
黒さび病の発生がみられた地域では、ステンレス剤の予防散布を励行する。親株床の面積が少ない場合はトンネル被覆等で病菌を死滅させる。しかし、高温時（30℃以上）の散布は薬害のおそれがあるのでさける。カブラヤガの葉裏への産卵を抑えるため、適時防除する。
- 2) 親株として用いる株は、採花前後も灌水、施肥、除草、防除管理を適宜行う。
- 3) 台刈り前には十分灌水を行い、1㎡当たりそさい5号で30g程度を施す。
- 4) 8月中下旬を目安に、親株を地上5cm程度の高さで刈り込む。

3 中輪キクのやなぎ芽の発生と処理

- 1) 9月咲ギクや秋ギクでは、7月下旬から8月上中旬に曇天、降雨等が続いた場合に発生する。定植時期が早い作型では発生しやすい。
- 2) 電照栽培では、停電等で3日間以上電照がストップした時や、電照期間が60日以上と長すぎた場合に発生が多くなる。
- 3) やなぎ芽の発生初期に1番上のわき芽だけを残し、不完全な蕾と他のわき芽を取り除く。なるべく早めに処置を行うことで、草姿がよくなる場合がある。

4 夏期の病害虫防除

夏期の農薬散布は、早朝か夕方の涼しくなってから実施する。また、農薬を複数の剤を混用した場合や、植物体がしおれた状態では薬害がでやすいので注意する。

夕方の防除であっても、噴霧直後は熱水が出やすいため、ゴム手袋越しに温度を確認して防除を行う。また、前の薬剤がホース内に残っている場合があるため、最初の薬液は周辺の雑草等に試しかけを行う。薬害が出やすい農薬は薬剤履歴をよく確認して高温時の使用に注意する。

1) ハダニ類

薬剤は、抵抗性の発達を避けるため、系統の異なるハダニ剤を使用する。圃場の周辺の除草を行うことで隠れ場所をなくすことも重要である。特に7~8月は除草に手が回らないことが多いので注意する。

防除時は葉裏に薬液がかかるよう、噴口をななめ上向きとして防除を行うが、最下部はかかりにくいいため、防除前に除葉する。キクの花ダニ類薬剤は、スターマイトフロアブル、ダニトロンフロアブル、コテツフロアブル、ダニサラバフロアブル、カネマイトフロアブル等を散布する。多発時は必ず殺卵力のあるバロックフロアブル等の殺虫剤を用い、発生数を減らして、殺ダニ剤を利用すると効果がある。同一系統の薬剤の近接散布は行わない。

2) アザミウマ類

破蕾期前より薬剤散布する。破蕾後の蕾の中にアザミウマ類が入った場合、防除は著しく困難になる。

薄暮時の散布効果が高い。付近の雑草や切り残し花が第一次発生源となるので除去する。

キクを加害するアザミウマ類はミカンキイロ、ミナミキイロ、ヒラズハナ、クログハナ等各種があるので、種を確認した上で、薬剤を選定する。ミカンキイロアザミウマ等は、キクえそ病を媒介するので特に注意する。

ミカンキイロアザミウマには、アフーム乳剤、カスケード乳剤等を散布する。それ以外の種にはハチハチ乳剤、プリンスフロアブル等を散布する。

3) アブラムシ類

夏は一時的に数が減少するが、秋には再び繁殖する。葉裏で越冬する個体もみられる。時々葉裏をチェックする。

同一薬剤を連用すると抵抗性がつき、効かなくなるので、系統の違う薬剤を計画的に使用する。特に、ワタアブラムシは一生のサイクルが短く抵抗性がつきやすい。圃場の周辺から侵入するので、よく観察し、初期に駆除する。種類によっては、生長点付近のみ発生するもの、葉裏を主体とするものがあるため、同一方向での噴口の防除は避ける。

キクのアブラムシ類薬剤は、オリオン水和剤 40、ウララ 50DF、アーデント水和剤等を散布する

5 スイセンの管理

1) 促成スイセンでは定植前から遮光ネット等を設置し、地温の低下を図り、発根と発芽を促すためスプリンクラーや灌水チューブ等による散水を行い、地温・気温を極力低下させる。畝間灌水の場合は発根部位（球根の根盤部）まで水が回るようにし、回ったらすぐ排水にこころがけ、停滞水がないようにする。

2) 季咲スイセンは、9月以降、乾燥した場合は、葉の長さを確保するため、用水が確保できる圃場では灌水を積極的に実施する。

6 ストックの育苗と初期管理

1) 播種後の管理は雨よけハウス等で行う。ハウスで管理する場合は、高温対策の

- ためにハウスの屋根の外側に遮熱ネット等を張り、ハウス内の気温を下げる。育苗箱はベンチ等の上で風通しを良くし、灌水は地温の低い早朝に行う。
- 2) 八重鑑別後、葉色が薄い場合は、OKF-1等の液肥を施用する。育苗日数20日程度の若苗定植を心がける。
 - 3) 本圃は、クロールピクリンやガスタード微粒剤で土壌消毒する。
 - 4) 本圃は、定植5日前からハウスの屋根の外側に遮熱ネット等を張り、ハウス内の気温を下げておく。2~3回に分けて十分に灌水して畝全体の水の通りをよくしておく。
 - 5) マルチを張る場合は土壌水分が十分にあるときに、土面と隙間がないよう密着するように張る。隙間があると風であおられるばかりでなく、地温が高くなる。
 - 6) 定植後は直ちに灌水し、液肥を施用し、活着を促す。
 - 7) 直播栽培では、立枯れ性の病害を予防するために有機質肥料の施肥は早めに行い、栽培床に十分灌水しておく。また、播種時の地表面の温度を極力下げるため、播種の5日程度前から70~80%の遮光資材をハウスの屋根にかけて、風通しを良くして地温の低下に努める。播種後は土を乾かさないように灌水し、発芽後は苗の徒長防止のため、直ちに遮光資材を取り除き、灌水は土の表面が乾いたら行う。
 - 8) 立枯れ性病害が発生した場合は、被害株を抜き取り、病原菌を調べる。立枯病（リゾクトニア菌）では、発病株を引っ張ると、地際からちぎれるが、ピシウム菌の場合は、引っ張ってもちぎれずに根がついてくる。立枯病（リゾクトニア菌）が発生した場合はリゾレックス水和剤を土壌灌注し、ピシウム菌が発生した場合はリドミル粒剤2を土壌表面散布する。

7 ハボタンの定植と初期管理

- 1) 切り花ハボタンは草丈を確保し、細く作り上げる必要がある。施設栽培の場合は、前作の肥料が残っている場合があるので、土壌分析を行ってから栽培する。露地栽培の場合は、基肥として石灰質肥料10~20kg/a、窒素、リン酸、カリを成分で各1kg/a施用する。
- 2) 本葉が2枚の若苗の時期に、12cm角ネットを使用し、1マスに1株植えつける。苗が老化する前に直ちに定植する。
- 3) 定植後、活着するまではしっかりと灌水をする。活着後は、土の表面が乾いたら灌水をし、草丈確保のため、乾燥しすぎないように注意する。